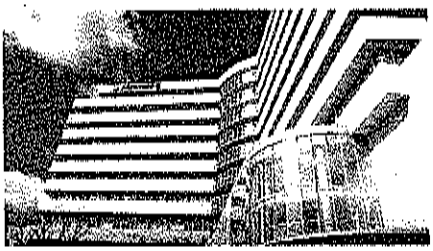
2/13 読売

感染対策徹底もクラスター発生

大阪暁明館病院

人手不足、ギリギリ対応

新型コロナウイルスのオミクロン株の爆発的拡大が起こり、医療供給体制のひっ迫が強まる中、大阪府は8日、「医療非常事態宣言」を出しました。大阪市此花区にある二次救急医療機関、大阪暁明（ぎょうめい）館病院では患者、職員合わせて70人のクラスター（感染者集団）が発生しました。人手不足がいっそう深刻になるもとで、ギリギリの対応が続く現場は―。（岡素晴）


大阪暁明館病院

西岡憲温事務長

「当初、17床でコロナ病棟を運用していましたが、1月末と2月初めの最も感染者が増えたとき32床まで埋まり、限界を超えてしまいました」。一昨年の秋以降、入院が必要な軽症・中等症のコロナ患者を受け入れてきた同病院の西岡憲温事務長は明かします。

同病院の発熱外来を訪れる患者は、1月第1週の時点では多くて1日15人ほどだったのが、1月31日には250人と爆発的に増えたといいます。

欠勤者が相次ぐ

クラスター発生の始まりは1月24日でした。60床ある回復期リハビリテーション病棟で、発熱した3人の入院患者の感染が確認されました。そのケアにあたっていた作業療法士、看護師らのほか、病棟にかかわったスタッフ全員にPCR検査を実施したところ、三十数人の感染が確認されました。

これ以上、クラスターが広がれば、もう一つコロナ病棟をつくるしかないという中、別の回復期リハ病棟（42床）からも〝火の手〟が上がります。

患者7人、職員8人の感染が明らかになったため、感染した7人以外の入院患者は、全員ほかの病棟へ移ってもらうことに。その上で、この回復期リハ病棟はパーティション（間仕切り）を置いて人の行き来をできなくしたり、ビニールを張ったりしてコロナ病棟に転用しなければなりませんでした。

個人防護具を身に着け、透析治療にあたる医療スタッフ＝4日、大阪市此花区（大阪暁明館病院提供）

「今はコロナ病棟を二つ運営している状況で当然、人手がたくさん必要になります。その上、今回のクラスター発生で職員も累計30人ほどが感染し、欠勤者が相次ぎました」

いまは欠勤者の復帰が進んだものの、しばらくは人手の確保が厳しい状況でした。同病院では1月末から全ての救急患者の受け入れをいったん停止。命にかかわるような緊急性がない手術や、リハビリも一時停止しました。

命守るインフラ

クラスターの発生を防ぐ上で同病院は、標準予防策の徹底にはかなり気を使いながらコロナ対応にあたってきたといいます。医療従事者である職員のワクチン3回目先行接種も昨年12月中に全て終えていました。コロナ病棟に従事するスタッフには、無症状感染者を早期発見するため、週1回のPCR定期検査を行ってきました。

西岡事務長は「それでもこれだけ広がってしまう。オミクロン株の感染力の強さを脅威に感じています」と話します。

一部の職員は今回、過大な業務の負担を強いられました。発熱外来の受診患者などに行うPCR検査は、1日500件を超えたこともありました。そのため院内で行う検体の精査は相当数に上り、保健所への結果報告は夜11時になることが少なくありませんでした。

一般希望者への3回目のワクチン接種も始まっており、西岡事務長は仕事量が増える一方だと指摘。とりわけ普段から人手などの余裕を持てない民間の医療機関は、想定外の感染拡大が起きれば、対応できる環境ではなくなると語ります。

「国の財政が厳しい中、医療にお金をかけすぎるなという意見もありますが、医療機関は国民の命を守るためのインフラのようなものでもあります。最低限の財政支援があればありがたいと思います」